

平成 27 年度 東京都内湾水生生物調査 11 月成魚調査 速報

●実施状況

11 月 18 日の成魚調査時の各地点の概況を下表に示す。

調査当日は小潮、満潮 9 時 46 分、干潮 15 時 15 分（東京都港湾局のデータ）であった。大雨の続いた 9 月のあと、10 月初めから湾内は下層の貧酸素水塊がほぼ解消し、9 月の調査では大きく減少した生物層が回復しつつあった。当日は、各調査地点の下層水は、溶存酸素濃度（DO）が 3.4~5.1mg/L であり、すべての地点で魚類が確認された。各地点とも透明度がこの時期としても良好であったことが特徴である。

調査地点	St. 10		St. 22		St. 25		St. 35	
調査時間帯	13:45~13:55		12:57~13:07		11:58~12:08		10:51~11:01	
水深(m)	7.3		13.8		15.7		25.3	
天候	曇り		曇り		曇り		晴れ	
気温	19.4		20.0		19.8		18.2	
風向/風速(m/s)	NE/4.5		NE/2.8		SSE/2.1		SE/2.0	
波浪(m)	0.3		0.3		0.1		0.1	
水色	濃(暗)・緑褐色		緑色・濃(暗)		緑色・濃(暗)		緑色・濃(暗)	
透明度(m)	5.4		5.6		3.2		9.0	
観測層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
水温(°C)	18.5	18.5	18.6	18.7	18.8	19.1	18.2	19.0
塩分	30.7	32.0	29.4	32.8	24.6	33.7	29.1	33.4
pH	8.6	8.5	8.5	8.5	8.2	8.4	8.5	8.6
DO(mg/L)	7.2	5.1	7.3	4.3	5.7	3.4	6.9	3.9
臭気	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し
備考								

観測層：上層(0m)・下層(海底面-1m)

●主な出現種等(速報なので、種名等は未確定です)

主な出現種等	St. 10	St. 22	St. 25	St. 35
魚種 (多い順 ^注)	マコガレイ (1)	マコガレイ (2)	サッパ (2)	テンジクダイ (4)
	テンジクダイ (1)		テンジクダイ (2)	アカハゼ (2)
			ハタタテヌメリ (1)	マコガレイ (1)
魚類以外	クシノハクモヒトデ (17)	クシノハクモヒトデ (137)	クシノハクモヒトデ (5)	クシノハクモヒトデ (1,804)
	ホンビノスガイ (12)	エビジャコ属 (11)	エビジャコ属 (5)	タイラギ稚貝 (26)
	イッカククモガニ (6)	イッカククモガニ (8)	サルエビ (3)	スナヒトデ (18)
備考	他に、シャコ (1) 確認	他に、シャコ (4)、タイラギ稚貝 (2) 確認	他に、シャコ (2)、タイラギ稚貝 (1) 確認	他に、シャコ (4)、トリガイ稚貝 (1) 確認

注) 表中の () 内の数字は個体数を表す。

St. 10

調査地点位置

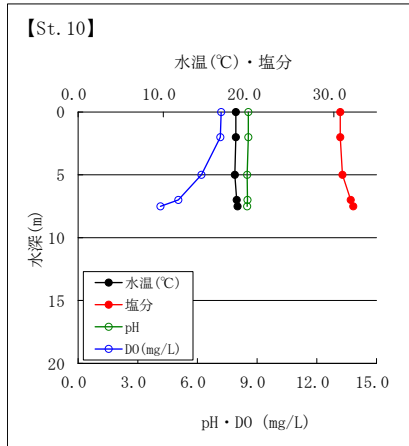


ディズニーランドの岸寄りに位置する。魚類は、マコガレイとテンジクダイが、その他の生物は、ホンビノスガイ、イッカクモガニ二等が確認された。下層水の溶存酸素は 5.1mg/L であり貧酸素（2 mg/L 以下）が解消していたことに加え、透明度が 5.4m もあった。

採取試料



水質の状況



全長約 15cm のサイズが 1 個体確認された。東京湾の泥底に多く生息するカレイの代表種。産卵期は冬で、40cm 以上のもも出現する。今回の調査では、本調査地点のほか St. 22、St. 35 で確認された。



東京湾の砂泥底に多く生息するが、内湾奥部には少ない。約 8cm までしか成長しない小型魚で、親魚が卵を口の中にくわえて、孵化するまで保護する習性を持つ。貧酸素に比較的つよい種。



今では東京湾にすっかり定着して、店頭で販売されているが、もともと北米原産の外来の二枚貝。貧酸素にも比較的強い種類である。今回は小型個体が多く確認された。



北米大陸西部沿岸原産の外来種。内湾の砂泥底に生息するカニで、東京湾奥部に多く生息する。貧酸素に比較的強く、通年で繁殖するため、優占種となることが多い。

St. 22

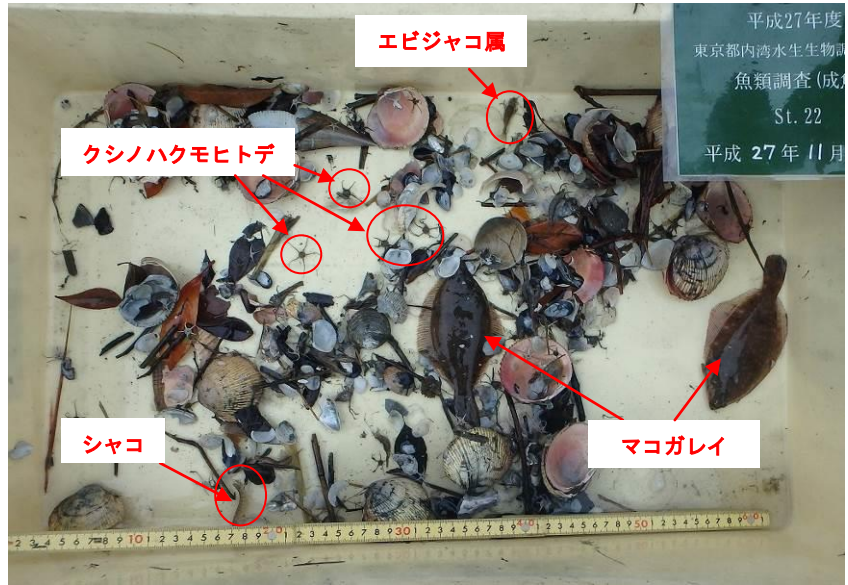
調査地点位置



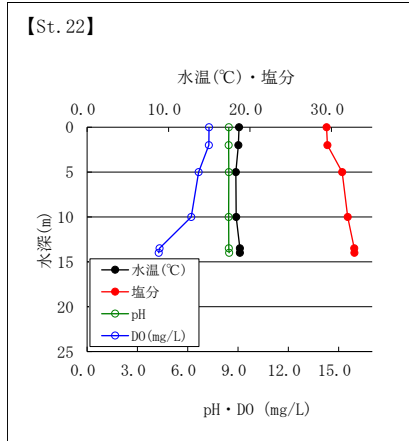
ディズニーランドの約 3km 沖合に位置する。

魚類はマコガレイが、その他の生物としては、クシノハクモヒトデ、シャコ、エビジャコ属、タイラギ(生きた稚貝)等が確認された。下層水の溶存酸素が 4.3mg/L と貧酸素状態が解消しており、9月の調査時には、死んだタイラギの貝殻が多く採取されたが、生物が生息可能環境が回復していた。

採取試料



水質の状況



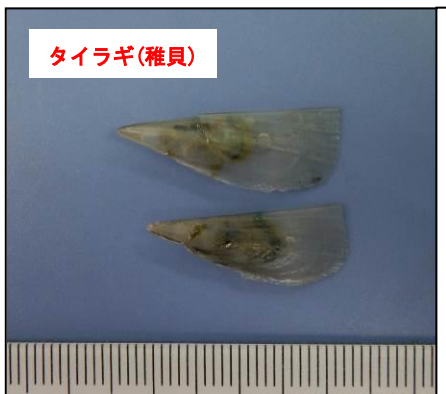
マコガレイ
 捕獲された 2 個体は、約 14~15cm で、St.10 とほぼ同サイズであった。本調査地点では、5月にも約 6~8cm のサイズのものが、4 個体確認され、貧酸素環境でなければ、本種の生息適地だと推定される。



クシノハクモヒトデ
 東京湾奥部の砂泥底に多く生息するクモヒトデの一種。貧酸素にも強く、夏季には本種しか採捕されないということがしばしばある。



シャコ
 東京湾では水深 15~30m の砂泥底にすむ。肉食性で甲殻類、多毛類等を捕えて食べる。近年夏季以外は、ほぼ継続して確認されている。今回は全地点で採捕されたが、小型個体のみであった。



タイラギ(稚貝)
 東京湾の砂泥底に生息する二枚貝。湾奥部では夏季に貧酸素により、斃死してしまい貝殻のみ確認される。今回は、約 3cm の生貝が確認された。10月以降に着底したのと思われる。

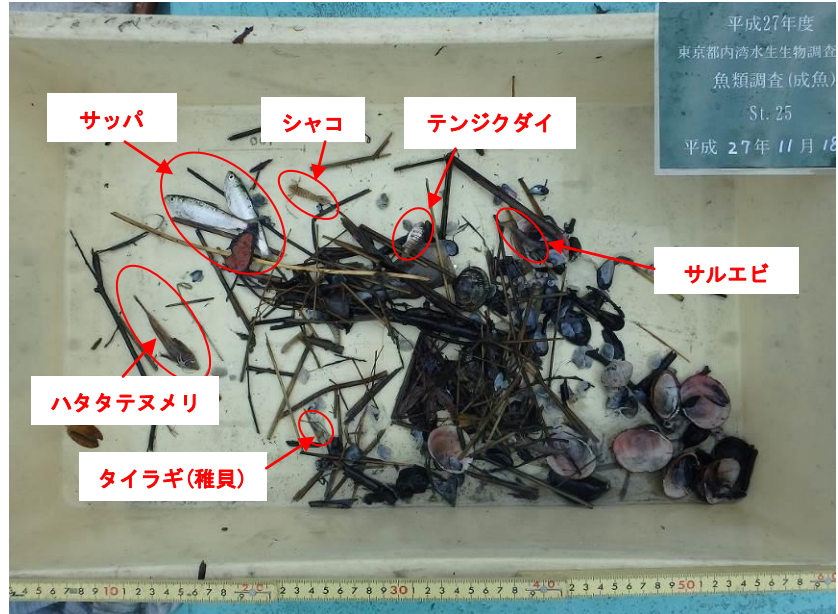
St. 25

調査地点位置

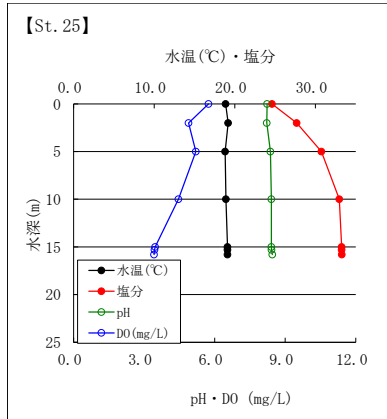


羽田空港の北東に位置する。魚類はサツパ、ハタタテヌメリ、テンジクダイが確認され、その他の生物としてクシノハクモヒトデ、シャコ、サルエビ等が確認された。下層水（約15m）の溶存酸素は3.4mg/Lと他の調査地点同一水深と比較してやや低かった。また、表層水の塩分は24.6で、河川水の影響がうかがわれた。

採取試料



水質の状況



東京都内湾に多く生息する。産卵期は春～夏で、夏季の稚魚調査では、本種の稚魚が多獲されている。東京湾ではほとんど食用とされていない。



東京都内湾の砂泥底に生息する、代表的な小型の底生魚類である。名前の通り体表面に粘液を多く分泌する。



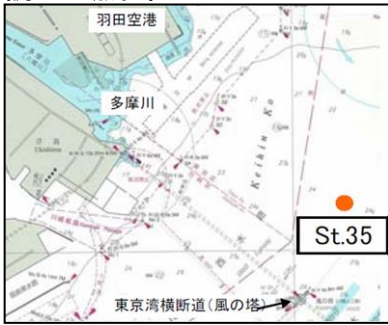
本種は、最大全長8cm程度の小型種で、水深100mまでの砂泥底に生息し、浅いところには見られない。食性は底生の甲殻類である。



東京湾で最も普通にみられる小型のクルマエビの仲間である。内湾の砂底～砂泥底に生息する。7～8月が産卵盛期である。

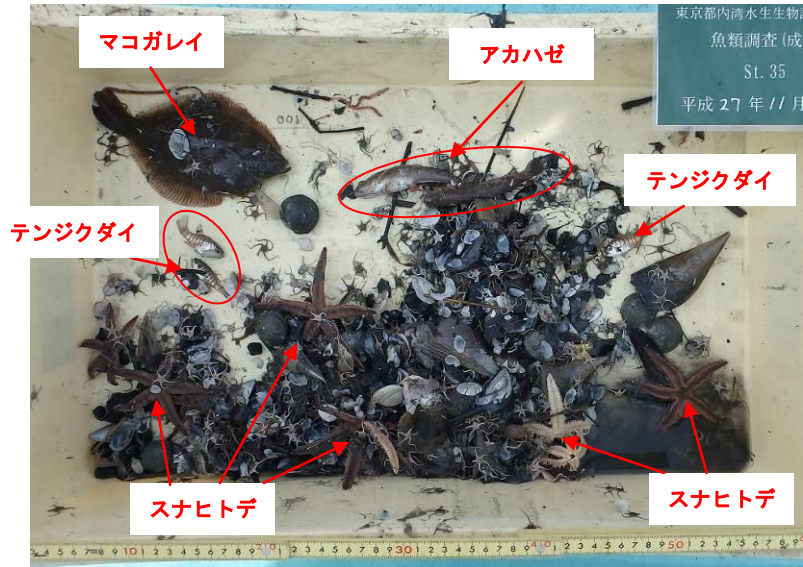
St. 35

調査地点位置

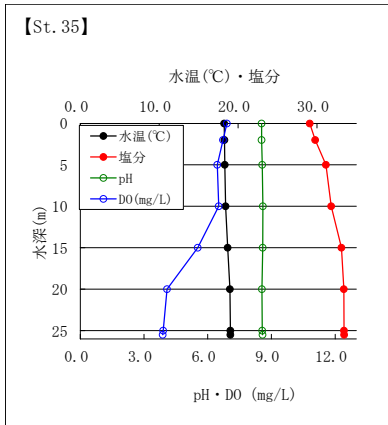


東京湾横断道の川崎人工島（風の塔）の北東に位置する。魚類はマコガレイ、アカハゼ、テンジクダイが確認された。その他の生物はクシノハクモヒトデが1000個体以上と多量に捕獲され、その他、スナヒトデ、タイラギ(稚貝)が確認された。下層水の溶存酸素は3.9mg/Lと貧酸素状態ではなかった。透明度は9.0mと、昨年や一昨年の同時期調査の5.0m、2.5mと比較して、高い値であった。

採取試料



水質の状況



本調査地点で捕獲されたマコガレイは全長20cmで最も大きく、太っていた。湾口部よりの移入個体で、貧酸素による成長阻害を受けなかったと推定される。



東京湾のやや深い砂泥底に生息するハゼで、浅場では確認されない。平成13年度以前は確認されていたが、近年は確認されていなかった。



内湾の砂泥底に生息する大型のヒトデである。砂泥中の小動物や小型の貝類を食べる。移動速度は速く、砂泥上をすべるように移動するといわれている。



タイラギ稚貝は、St. 10を除く3地点で確認されたが、本調査地点で最も多く26個体が確認された。底層水貧酸素環境からの回復が、最も早かったためと推定される。